

---

**ストーリーを弄りたくなって作ってしまった。後悔はしていない-The birth of spirit-**

亡霊さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無性に妖々夢のストーリーを弄りたくなって作ってしまった。後悔はしてない - The birth of spirit -

### 【Nコード】

N1297P

### 【作者名】

亡霊さん

### 【あらすじ】

この話は連載中の「無性に妖々夢のストーリーを弄りたくなって作ってしまった。後悔はしてない」(URL <http://ncode.syosetu.com/n9601i/>)のサイドストーリーですので、先にそちらをお読みになった方がこの話の内容がわかりやすくなります

(前書き)

ついカッとなって投稿してしまいました。反省はしているが後悔はしてない

突然だが、1人の少女は紅い屋敷へと足を運んでいる

それが何故なのかは少女自身も知らない。ただ、何かに導かれる様に紅い屋敷が目に入ったのだ

問題はそれだけではないだろう

その場所が何処であるだとか、何故自分がこんな所にいるのだろうか考えればキリが無い

だが少女は深い疑問を持たずその空気のように軽いその足を一歩ずつ進める

ふとその少女は泉を超えた辺りで金髪の少女が目映った

その少女は黒く大きな十字架を右手に持って倒れている

慌てて少女の介抱をしようとする彼女

しかし少女はその時点で2つの選択ミスを犯していた

少女は自分が既に死者である事を知っていた

生前はとある天皇に使え、式を操る陰陽師だった

その為に救護用の式を使おうとするが、反応しない

「え？」

彼女は驚く

「……この幻想郷には式を操る賢者がいるけど、彼女曰く死者は生者に力を貸す者……そう死んだ時点でその力は無くなるのよ」

少女は起き上がり、左手を空に掲げるとゆっくり握っていたその拳を開く

そう……少女の2つ目の失態は

「流星・デス・メテオ」

すると少女のはるか上空にぽっかりと黒い穴が開き、そこから黒光りした隕石が落ちてきた

その猛攻は彼女の知っている八雲紫と同等。勿論生前の時の彼女ですら赤子の様な扱いなのは間違いない

危機感を悟った彼女は出来るだけその攻撃を避けながら距離を離していく

「無駄よ！私の攻撃の範囲は無限、近場でどうする事も出来ない貴方には遠くへ逃げてでも犬死するだけよ」

少女の言葉はまるで彼女の運命をその手に握っている様に言い、それを今見事に当てようとしている

そう、時間が進むにつれて隕石の数は大きく、範囲も広くなっていく

それにつれて少女から放たれる妖気が彼女にも伝わってくる

「こんな事も出来るのよ」

少女はそう言うと人差し指を彼女に差す

その合図と共に黒光りする隕石が彼女をはさむように行方を妨げる

そして挟まれた彼女の前には1個の隕石

もう駄目

そんな事を思っていた時この場に相応しく無い透き通った言葉が聞こえてきた

「命剣・ミスティルティン」

すると黒光した隕石から草木が生え、消えていく

後には堅そうな木々が彼女を彼女を守るかのように囲む

少女はその声の主を見て舌打ちをする

「・・・何の用？邪魔する気？」

彼女も声の主を見る

事もあるつかこの声の主もまた少女

長くストレートの赤髪、紅いメイド服腰回りにはカッターを大量に所持している

何しろその姿はまるで少女と言うよりも若く

幼女と言うべきに相應しい見た目

「お前が私のお客様に手を掛けようとしたんでしょ？ルーミア」

ルーミアと呼ばれたその少女はやや鬱陶しそうな顔をする

「あらそう？とってもそうには見えないけど」

「そうよ。彼女は知らないみたいだけどね」

「なら早く言ってよね。いちいち貴方に関わってたら取れる物も取れなくなりそうだわ」

「全く・・・相変わらずの食いしん坊ね」

くすくすと笑うメイド服の少女

「私じゃないわよ・・・」

剥れるルーミア。先程までの異常な殺気とは裏腹に可愛らしい表情をする

「まあいいわ。お客様待たせてるからじゃあね」

そう言うとメイド服の少女が彼女の方へと向かってくる

「大変お待たせしました。」

ペコリとお辞儀するあたり、メイドだけあって礼儀正しい

「いえ・・・ところで貴方は？」

すると幼女の方は赤いカードを渡して来た

「スカレット家の招待状でございます。こちらを門番にお見せ頂ければ中に入れますのでご協力の方よろしくお願い申し上げます」

「招待状？」

首を傾げる彼女。すると

「これが無い方での御来館はあまりオススメ出来ないみたいなんです。それと、大変申し訳ございませんが・・・お名前の方お伺いしてもよろしいですか？でないとお嬢様に怒られますので・・・」

とペンを差しだしてきた。

彼女の方はペンを使い方が良く分からなかったが、幼女の方がペンの使い方を簡単に説明してくれたため困る事は無かった

「朝日奈鈴音様・・・でよろしいですか？」

彼女は頷く

「承知いたしました。それではすぐに到着しますので今しばらくお待ち下さい」

そう言っつて鈴音の手を握る

するとフツと景色が変わった

大きな館、大きな囲いの柵に大きめに作られている柵の門、そこに一人の中華風の服装をした少女が立っている

「到着です。手続きはあそこの・・・すみません、しばらくお待ちください」

すると少女は高速でその場所に向かうと宙返りしたかと思うと中華風の服装をした少女が空中に浮いた

次の瞬間

刃物と思われる者が一瞬にしてその者を取り囲む様に現れ次々に刺していった

「さ、お待ちせいたしました。門番はご覧の通り休憩中ですので、私がそれをお預かりいたします」

満面の笑みでそう言うメイド少女

その先には休憩と言うよりノックダウンが正しい表現であろう中華風の少女

今の行動でよりいっそう笑顔が恐ろしく見えたのは言うまでも無い

こうして中華風の少女を素通りして2人は館へと向かうが館内に入るが、まず鈴音が驚いた事と言えば

鈴音の知っている部屋とはまた異なつた空間

シャンデリア、テーブル、椅子・・・

豪華なのは知っているが、部屋自体に気品があるかのよう

外の景色は彼女の知っている天皇の部屋には劣るものの、中の構造

はこちらの方が凄い

「どうかなさいました？」

幼女が鈴音に尋ねて来る

「いえ……私の知っている所ではこの様な構造の家を見た事が無かったので……」

「左様でございますか。それでは朝日奈鈴音様、貴方の世界では海の向こうの世界と言うのをご存じでしょうか？」

「海の向こう……？」

首を傾げる鈴音に嬉しそうに語る幼女

「鈴音様がいらっしゃる国の構造の家は極端に珍しいのです。迂闊に国の中に入らせて貰えないからです。いわば鎖国と言えば貴方も御存じでは無いのでしょうか？しかし、海の向こうの世界はこの館の様な構造をしていらっしゃる国も多いのです。」

その得意げそうに語るその少女に鈴音は自然と口元が緩む

「そうですね・・・」

それを見た少女は口を尖らせる

「むー・・・子供みたいとか思わないで下さい」

「・・・ごめんなさいね。あまりにも楽しそうに言うものだからつい、ね」

くすくす笑う鈴音

なんだか楽しそうな2人だが、目の前にあるドアが2人の足元を止めた

少女は途端に緊迫した状態になって鈴音に伝えた

「ここはお嬢様のお部屋でございます。くれぐれも問題を起こさぬようご協力お願いします」

そう言うとドアの方向へ向きノックする

「お嬢様、私でございます。お客様をお連れ致しましたのでそのご挨拶に参りました」

中からの「入りなさい」に少女は引き戸を引く

鈴音は声に導かれるように部屋の中に入る

部屋の中はそれまでとは比べ物にならないほど暗くその雰囲気はまるで吸血鬼と対面する様かの如く背筋が凍る

「一体何の用？」

声の主・・・お嬢様らしき人物が尋ねる

すると幼女メイドはそれに答える

「このお方は私のお客様でございます。ですが、お嬢様に挨拶をしたいと言う事なので連れてまいりました」

「そう・・・、それは良い心がけね。」と見えない声の主は言う

すると一瞬にして大量の血の色をした蝙蝠がザワーっと散ると声の主の正体が現れた

その声の主の正体やっぱり幼女

しかしメイド幼女とは違い、水色のショートヘア、黒色の瞳、服はピンク色一式で赤色の長リボンに帽子もやはりピンク

声の主はメイド幼女に警告する

「でも貴方も幽霊に魅入られない様に注意する事ね。まあ多少魅入られても大丈夫だけれど」

「承知いたしました、お嬢様。それでは鈴音様、参りましょう」

きっかりと一礼、その姿は幼女でありながらもしっかりとしたメイドである事が伺えた

「はい・・・それでは失礼します」

鈴音もメイド幼女につられて頭を下げる

「そんなに畏まらなくて良いよ。それにしても・・・鈴音だけ？  
あんたも我が館のメイドになるつもり？」

幼女はそんな鈴音を見て笑う

だがこの幼女、見た目は本当に幼女なのだが背中に大きな蝙蝠の翼・  
・

そして見る者を威圧するかのような妖気

伊達に幼女メイドを率いているわけではない事は鈴音にも分かって  
いた

「お嬢様、そろそろよろしいですか？」

メイドの言葉に幼女は言う

「客と話すんだったわね、引きとめて悪かったわ。お行きなさい」

「・・・失礼します」

鈴音は再び頭をペコリと下げると幼女の部屋から出て行った

「よく聞いて下さい・・・貴方は何故ここに召還されてしまったのかを」

歩きながらメイド少女は言う

「・・・私は確かに死にました」

「知っていますよ」

「貴方の肉体は元の姿に戻ったのは知ってますか？」

「え・・・？」

その反応に幼女メイドが答える

「太古の昔・・・ある死神は仕事の事で悩みいつしかこの死神の世  
界から解放されるよう常にある場所で願っていました」

お嬢様と名乗る部屋から2部屋離れた場所に着くと彼女は一旦話を  
止め、ドアの引き戸を引く

「さあ、ゆつくりと・・・この椅子にお座り下さい」

はい・・・と言われたままに座る鈴音

しかし座り心地の良さに思わず驚く

「ふふっ、気にいってくれましたか？私の部屋の中でもお気に入りな  
んですよ？」

無邪気に笑うメイド幼女

すると彼女は紅茶とクッキーを目の前に置く

鈴音にはそれが魔法にしか見えなかった

何故なら・・・彼女の手からそれらが現れたからだ

それを差し出すと彼女は険しい表情になって話を始めた

この苦痛から解放されたいと

「自由を求めた死神の心には自由を手に入れようとしています」

職、種族、自分と言う存在を消してまでも

「・・・一つ・・・質問してもよろしいですか？」

鈴音が問う

「何でしょうか？」

「貴方は先程元の姿に戻られたと仰いっていましたが、自分の存在

を消したと言った辺り矛盾を感じたのですが・・・」

幼女メイドは上からリンゴを落とし幼女の目の前の所で皮がきれいに剥け地上ギリギリのところまでリンゴの行方を絶つ奇術を見せた

鈴音はそれを見て驚く

「今のどうやったのですか？凄過ぎて良く分からないのですが・・・」

「

「今のはとある死神の能力。確か距離と重力を操る力を持っていた筈です・・・物体を把握するには距離と重量が基本でしょう？彼女はそれを見事に操る事が可能なのでございます。今は当館の冷蔵庫から能力で此処に持ってきて、能力で皮をむいて能力で皮の向いたリンゴをお嬢様の所にお届致しました。でも、皮むきの方は絶妙な場所で切り物をセットしないといけないのですけどね」

幼女メイドは一瞬にこやかに笑う

「そう願っているうちに罪深き桜から1つの純粋な心が生まれたのです。またとないチャンスに彼女はその心と体を同調させることで輪廻の旅に出る事となるのです。従って彼女は自分と心を同調させ1つの存在にする事で自由と手にする事が出来ました。しかし、それも束の間でした。」

彼女の1つの存在が死の際に2つに分かれ、身体が先に幻想郷担当の裁判員・・・閻魔である四季映姫・ヤマザナドゥに渡ってしまつた為にその死神が蘇ろうとしているのです

メイド幼女が「死」「閻魔」「四季映姫」と言った時点で内心自分がその死神なのではと思つて鈴音は勘づいた

その様子をメイド幼女は見逃さない

「・・・気がつきました？十王は恐らく貴方を罪深き桜に戻すでしょう。ですが、それでは心とも無いと2人の閻魔が貴方に真実を知らせにここに来させたのでしょう。1人は貴方の知っている四季映姫・・・もう1人は貴方の　いえ、これは後に知る事となるので私の口からは言いません」

メイド幼女は珍しく言葉を詰まらせた

「朝日奈鈴音とはおめえの事だな」

鈴音には久しい声が聞こえてくる

長らく聞いて無かったこの声

「お迎えが来たようですね」

メイド幼女も言う

「……彼が迎えと言っつのは？」

「俺が答える」

そう言っつと声の主は現れた

豪華な冠、肩あて、服装が立派。思わず映姫を思い出させる

しかし目の前の相手は映姫では無く

「剛弥……さん？」

目の前にいる相手はあの日の荒波剛弥

「久しぶりだな。まあでも・・・驚いた」

「え？」

「お前の事は幽斗から聞いた。それよりも思い出したんだ」

「何をですか・・・？」

剛弥はメイド幼女の方へ向き

「邪魔して悪かったな。俺らは帰るぜ」

「1つ質問してもよろしいですか？」

メイド幼女は尋ねる

「何故この場所をお選びになられたのですか？」

「こいつに関係無い奴じゃないとここまで話してくれそうにないからな。それと俺からも質問したいがその情報が何処から手に入れた？」

ふふつとメイド幼女が笑う

「ちょっとした芸でございます」

「ハッ！覗き魔がでたらめ言っな。まあ今回は助かった、一応礼はするぜ」

そう言うと鈴音の左手で手を引き右手をひらひらと手を振って剛弥はその部屋から出て行った

「またのお越しをお待ちしております・・・またのご縁があれば」

幼女メイドは静かに頭を下げる

彼等が2度とこの館に来ない事を知りながら・・・

「・・・ここがお前の生まれた場所だ」

剛弥がそう指を指すのは桜の花

「これが・・・先程申し上げていた罪深き桜の花ですか・・・」

紫色の花が咲く桜の花

それは色鮮やかでは無いけれど見る者を魅了するかの様なそんな桜である

「そつだ。だが、この桜何で罪深き紫の桜と呼ばれているか分かるか？」

「さあ・・・死神がその場所であるお願いをしたとまでしか分かりません」

「そつか、じゃあこの際だから言っておく必要があるな」

と言うと剛弥は人差し指を軽く紫の桜に触れる

すると触れた部分から霊が2、3体ほど現れた

「・・・式を操るお前ならこれがなんだかわかるよな？」

「はい、これは怨霊の類・・・恐らく強い妬みや意志が宿っていますね」

ハハツ、違いねえ。流石は名のある陰陽師だと剛弥は笑う

「指で出てくる程怨霊がいると言うのは危険ではないのでしょうか？」

笑っている剛弥に終始沈黙していた鈴音だったが、やがて口を開いた

「だが、ここは無縁塚。この先には何も無いし道を反れば冥界や三途の川だ。あるとすればお前のいる世界から物が落ちて来るだけだ。怨霊が喚こうが何しようが外に漏れる事はねえ」

最後に「理解したか？」と鈴音に問う剛弥

「はい・・・ですが、何故死神はこの場所を選んだのでしょうか？」

「その事も一応今から話そうと思つてたところだ。あいつは元々俺が死神時代から一緒にいた仲でな、結構遊びまわつてたもんさ。小野塚小町つて奴がサボつてるとか映姫は言つてるが、俺らがどうこつ言えたもんじゃないんだよなーこれが・・・まあでも、ある日俺が死神から閻魔に出世した時に奴とは別々になつてから様子が変つちまつたのさ」

何でも奴の下に就いた奴等は全員怠けもので奴らの仕事は全て1人でやつてたらしい。だが、死神の世界じゃ仕事から逃げる事は制裁を受けなければならぬからな。それがあいつにとって負担だつたんだろうな

鈴音は俯く

「・・・夢で自分の机の上に紙が山積みされていたのです」

それを聞いた剛弥は驚いた。しかし、鈴音は話を続ける

「他にも銃を持った死神と戦つていたり等・・・夢だったのでうる覚えですが、もしかしたらこの光景は彼女の辿つた道なのかもしれない」

「・・・その通りだ」

剛弥は桜の方へ向くと反応を見せた

「その銃を持った奴ってのはあいつの同期だな。主に書記担当だったが、仕事が出来て人使いが良い。奴はあいつと同様十王メンバー直属の部署で一番上をやっていたんだが、仕事内容は断然奴の方が楽だったに違いないな。まあでも、あいつも死神の世界の職を辞めてしまったのさ。さっき言った通り死神の職を離れるときには必ず罰を受けなければならぬが、その執行者があいつに選ばれて・・・後はお前の話した通りさ」

「そうですね・・・」

剛弥はそれを話そうかどうかは悩んだものの、結局言ってしまった

結果、剛弥の予想通り鈴音が悲しそうな表情になってしまう

「でもまあ・・・それはお前の知る所では無いし、いつかお前が俺を好きになっただろう。それも恐らく奴の心がお前の心を突き動かしただけなのさ」

鈴音は何も言わない

鈴音も何となくは勘づいてはいた

好きなのに分からない

剛弥にはそれが幽斗に1つの勘違いを生ませてしまったのだろう

いや、違う

剛弥を慰める為の一言だったのだろうと彼は思う

「・・・お前はこれからこの桜の一部となるが、何か心残りはあるか？」

鈴音は首を振る

それに剛弥は疑問に思った

「私は剛弥さんが1つ間違えた事を言った様な気がします」

「何だ？」

「それは私が死神さんの心だけで貴方を好きになつたわけではありません。好きになる、ならないは私が決めた事です。なのに何故貴方はそう言うのでしょうか・・・？」

「あ？」

剛弥には彼女の言葉の意味が分からない

「元は2つの存在であつても心は1つです。それを偽りだと貴方は言うのですか!？」

彼女がこんなに必死になつた姿を剛弥は見た事が無かつた

「私は違つと思います・・・。例え存在が偽りだとしても、その想いは偽りでは無いと思います」

「・・・その証拠は？」

「簡単な事でございます」

口元に笑みを浮かべて鈴音は続けた

「 私がここにいる事です。」

剛弥は閻魔の被る豪華な帽子を整えるとやれやれと溜息をつく

「おめえにはやられたぜ、俺を負かした記念として出来る事があるなら1つだけ叶えてやるよ」

剛弥は鈴音の方に顔を戻すが、今度は鈴音が紫の桜を見上げる

「私の願いは特にありません。人生色々ありましたが、もう1度生まれ変わるなら・・・」

そう・・・

もう1度自分に生まれ変わりたいですね

「ふう……」

剛弥は胸ポケットにある煙草を1本加えると溜息をつく

「あいつ見てるとどうもあの時までのあいつと重なっちまう」

その煙草に火を付け紫の桜の方へ向く

もうこの空間に彼女はいない

彼女はあるべき姿に戻ったのだ

剛弥は死神に罪は無いだろうと予想している

何故ならあの桜は罪深い魂が集う桜……普通なら村正の様な奴が  
死神に取り憑いていた筈だった

だが彼女は負の念を持ってあの桜に接触したのにも関わらず、あの  
ような純粹な霊が生まれた

と言う事は彼女の心が純粹だったに違いない

すると十王達も驚き彼女の裁判を少し改めなければいけなくなるだ  
ろうな

そう思う剛弥も一応十王の一員であり、今不在の死神の分の仕事も  
こなさなくてはならない

煙草を手に取り煙を口から吐くと数秒紫の桜に黙祷し、帰って行った

「……」

少女は目を開けると見慣れない部屋にいることに気がついた

「此処はある十王の控室です」

自分の他に誰がいる

再びこのまま寝ても良かったが、そうもいかない

起き上がって周りに誰がいるのか確認する

すると豪華な冠、服装

見てすぐに閻魔の制服であることに気がつく

「私はどの位寝ていたのでしょうか？」

閻魔は言う

「恐らく数十年程でしょうね」

「……なるほど。朝日奈はその位しか生きられませんでしたか」

「裁かれる身がそんなに暢気で良いのですか？」

閻魔は首をかしげる

「・・・重々承知しております。それよりも挨拶申し遅れましてすみません。私は十王剛弥直属の死神、リオン・タナトウスでございます。貴方は・・・四季映姫様で合っていますでしょうか？」

四季映姫と呼ばれた閻魔は目を細める

どうやらこの死神は自分の状況より周りに対する気配りを最優先にするらしい

なるほど・・・

彼女が仕事上で文句を何一つ言えなかったのはこれのせいでもあるのかと映姫は静かに考える

「ええ、勿論」と返事をしながら・・・

「それでは四季映姫様、私は今から裁かれに行つてきます。恐らくもう二度とここには戻つて来られないかもしれませんが・・・」

「待ちなさい」

死神が1歩踏み出す瞬間に映姫が止める

「・・・貴方には最優先の任務があるわ。裁判が終わったら幻想郷で頼みたい仕事があるんだけどいいかな？」

覚束ない返事をする彼女

恐らく彼女の予想と閻魔達の予想は大きく違うのだろう

すると死神が尋ねる

「具体的にどんな仕事を・・・？」

「ちょっと監視して貰いたい幽霊がいるので依頼を受けて貰いたいのですが？」

「・・・承知いたしました。では、またお会いできれば後ほど」

「ええ・・・」

そう言って死神はその部屋を去った

## （後書き）

この話を作ってしまった理由をここで言います

- ・連載本編の番外編にする予定だったが、スペースが無い
  - ・連載本編で登場する2人がどうしても出なかった
  - ・次回作の設定等のテスト
  - ・なので同じ様な内容を2回書かないといけない気がする」と面倒なので短編と言う形にさせて貰っています
  - ・連載本編は修正中ですので途中話がぶつとんでるのはご愛敬
  - ・紅魔館メンバーの一部が登場して無いのは仕様。恐らく次回作で明らかになりそうな気がする
- まあこんなところでしょう。早い話「ついカツとなってry」

キャラ紹介等は後ほど活動報告に書きます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1297p/>

---

無性に妖々夢のストーリーを弄りたくなって作ってしまった。後悔はしてない

2010年11月25日13時59分発行